

「アジア」におけるニューミュージックと J ポップの形成

アニータ・ドレックスラー (Anita DREXLER)

大阪大学大学院博士後期課程 (D3)

本発表では、1990 年代前半に日本で流行した「アジアン・ポップス」が、ニューミュージックから J ポップへの転換にいかなる役割を果たしたのかを再検討する。

1980 年代末から 1990 年代初頭にかけて、日本の音楽産業は「アジア」的アイデンティティを模索しながら、華語圏を中心とするアーティストを積極的に紹介した。従来、日本市場に進出していた欧米系アーティストとは異なり、彼らは日本語で歌うことを求められず、むしろ自国語での歌唱が「エキゾチズム」を喚起する要素として強調された。他方、そのレパトリーの多くは日本のニューミュージック系作曲家が提供した楽曲であり、この点は日本の聴衆に向けて明確に提示されていた。

一方で、これらの楽曲がアジア各地で広く知られるようになったにもかかわらず、それらが日本のシンガーソングライターによる作品であるという事実は、非日本語圏ではほとんど共有されていなかった。この認知の非対称性は、日本とアジア市場との相互交流が J ポップの形成に与えた影響を再考する契機となる。

これまでニューミュージックおよび J ポップの成立は主として英語圏との関係から論じられてきたが、実際には華語圏を中心とするアジア市場との関係こそが転換を促し、J ポップに国際的魅力を付与したと考えられる。本発表では鳥賀陽弘道の J ポップ進化論を手がかりに、ヤマハが 2002 年に刊行した三枚組コンピレーション『アジアン・カバーズ』の一枚『中島みゆきのアジアン・カバーズ』を事例として取り上げ、J ポップ形成におけるインターアジア的交流の意義を明らかにする。